待兼山俳句会

第五〇〇回記念句会　句会報

Machikaneyama
HAIKU

この第五〇〇回記念句会の句会報を
これまで営々と待兼山俳句会を築いて来られた
諸先輩に捧げます。

廣太郎先生ご祝辞

稲畑廣太郎でございます。本日は待兼山俳句会の第五百回記念句会を心からお祝い申上げます。元々は六甲会でお話が出まして、日にちも決めて頂ければ結構だということで、勝手ながらこの日を選ばせて頂きました。

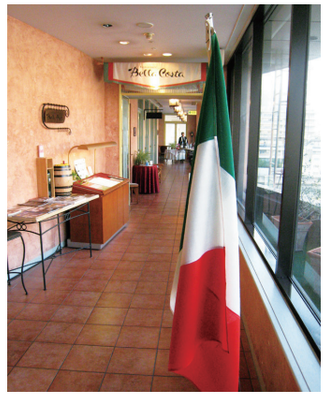
私が生まれ育ったのは芦屋でございまして、関西に25年、東京に移ってから29年、東京で生活する方が長くなりましたが、そうこうしている内に関西でのホトトギスの仕事が増えて、特に10月は毎週関西に来ることになっています。来週の土曜日もこのホテルに入る予定になっています。俳句の縁といいますか、地域を問わず動いていますが、私は世界で一番関西が好きなので、こういうご縁がありまして、関西の皆さんと句の縁で繋がらせて頂くことは望外の喜びでございます。どうぞこれからもご健吟頂きまして、またどこかの句会で皆さんとお会いできますことを楽しみにしております。

去年の12月に禁酒したことがございます。そのときの苦しみが忘れられません。それが尾を引いているのか、グラスをみると喉の奥から舌が出てくるようです。本当に今回は五百回という節目の素晴らしい会にお招き頂きまして、句の縁で素晴らしい皆様と一緒に花鳥諷詠の勉強ができましたことを感謝致しております。有難うございます。

ということで拙い言葉でございましたが、感謝とお祝いの言葉とさせて頂きます。本当に有難うございます。

平成23年10月8日

第五百回記念句会
十月八日(土)
レストランベラコスタ
締切三時
兼題
馬肥ゆる(廣太郎)
豊年(直入)
紅葉(あや)
卓上
野茨、りんどう、鶏頭
菊、山ごぼう、藤袴
投句者
義雄、香月、嵐耕
三名



待兼山俳句会

井上浩一郎

旧制浪速高等学校の俳句会が俳句教室として発足したのは昭和五十四年の事である。私の名がその第五回目の句会に記録されているというが、たしかに、まだ仕事をしていた頃、浪高同窓会報か何かで見つけたのであろう、ひょいと顔を出した覚えはある。しかし私が継続して俳句に取組むようになったのは、その十年ほど後のことで、大阪倶楽部に入会し、汀子先生ご指導の俳句部に所属するようになってからのことである。当時、大阪倶楽部俳句部委員長は山田不染氏で、同時に旧制浪速高等学校俳句会の主導者でもあり、そのおすすめというよりは命令で、浪高俳句会にも出席するようになった。当時の選者は山田不染、林直入、吉年虹二の三氏で、公私ともにいろいろと御指導いただいたが、その後、虹二さんからは結社未央につながり、直入さんからは関西草樹会につながることになる。

その後、浪高俳句会は私どもがお世話をしていた時期を経て、やがて大阪大学卒業生が参加し、主体となってゆく待兼山俳句会に移行し、若返り、拡大し、ますます充実してきた。そして今日、稲畑廣太郎先生をお迎えして、第五百回記念句会を迎えることが出来たことはまことに喜ばしい。

それにつけても、昔、浪高俳句教室の発足にかかわり、現在まで一貫して待兼山俳句会の選者をされている林直入さんのこの会へのご貢献を思わずにはいられない。今、たまたまご病気ご静養中であるが、一日も早く恢復され、元気にご活躍されることを心からお祈りする。

平成23年10月8日

待兼山俳句会第五〇〇回記念句会祝句

西に賀の続き爽やかなる旅路　稲畑廣太郎
待兼を詠み讃え来し豊の秋　林　直入
言祝ぎの待兼山の十三夜　長山あや

（以下五十音順）

五百回銀杏と鰐の句座嬉し　有馬健馬
重ね来し会に今日照る紅葉かな　井上浩一郎
薄紅葉記念句会へ同志来る　上田元彦
菊薫る五百回目の大句会　片岡京子
待ち兼ねし五百回なる菊日和　川崎香月
菊薫る待兼山へ五百段　斎藤義雄
縁ありて寿ぐ席や秋麗　佐伯箕川
天高し五百回てふ句会かな　佐伯道子
秋夕べ待兼五〇〇祝ぐ句会　阪本ゆたか
待兼によき師よき友秋晴るる　鈴木輝子
五百回祝ひ龍胆ゆるびゆき　鈴木敏夫
金色の秋の夕暮記念の日　瀬戸幹三
百菊や待兼の句座五百回　田中嵐耕
秋草の盛り花のやう句の縁　鶴岡言成
人と句の数多の出会ひ秋に祝ぐ　寺岡　翠
豊の秋千枚の田に千の彩　中村和江
爽やかや孜孜と迎へし五〇〇回　西村浩風
秋晴の今日を集ひて祝句会　根来真知子
萌え出でし発句の集ひに豊の秋　東中　乱
天高し待兼はれの五百回　東野太美子
弥栄の句会ことほぐ初紅葉　平井瑛三
五百回祝ふ紫式部かな　前田草机
五百回記念の句座の爽やかに　三宅洛艸
秋草の花の華やぐ祝句会　森　茉衣
菊日和古き句友の皆若し　山戸暁子

待兼山俳句会

第五百回　世話人　鶴岡言成・山戸暁子・鈴木敏夫・根来眞知子

平成二十三年十月八日（土）　会場　リーガロイヤルホテル大阪 レストラン ベラコスタ
締切　午後三時

出席者　稲畑廣太郎・井上浩一郎・長山あや・有馬健馬・上田元彦・片岡京子・佐伯箕川・佐伯道子
坂本ゆたか・鈴木輝子・鈴木敏夫・瀬戸幹三・鶴岡言成・寺岡 翠・中村和江・西村浩風
根来眞知子・東中乱・東野太美子・平井瑛三・三宅洛艸・森 茉衣・山戸暁子
投句者　川崎香月・斎藤義雄・田中嵐耕

出席者二十三名　投句者三名　計二十六名

兼　題　馬肥ゆる（廣太郎先生）　豊年（直入）　紅葉（あや）
卓上に　菊・りんどう・藤袴・野茨・鶏頭・山ごぼう　当季雑詠　通じて十句

次　回
吟行　平成二十三年十月三十日（日）、三十一日（月）　兵庫県平福および西はりま天文台公園
例会　平成二十三年十一月二十一日（月）　会場　大阪倶楽部　会議室
兼題　神の留守・時雨（浩一郎）　帰り花・小春（あや）
締切　午後三時

選者吟

野の色の卓に華やぎ藤袴　廣太郎
出来秋を車窓に嵌めて賀へ急ぐ
豊年を射貫く新幹線鉄路

重ね来し会に今日照る紅葉かな　浩一郎
牧の風ひきしまり来て馬肥ゆる
この天を力の限り鳥渡る

風立ちて夕日に炎立つ紅葉　あや
豊年の香に一村の浮みゐる
壷を溢る秋草に祝ぐ句の縁

廣太郎 選

豊年や歌ふ翁に前歯なく　幹三
露天湯に味はふ空気峡紅葉　言成
◎牧の風ひきしまり来て馬肥ゆる　浩一郎
はぢらいし乙女のごとく薄紅葉　暁子
馬肥ゆる言ひ訳しつつもう一膳　健馬
みざくろの豊か朱色のきらめきぬ　敏夫
高からぬ大和三山豊の秋　香月
無位無冠旅こそよけれ鰯雲　義雄
◎せせらぎの川となりゆく稲穂波　和江
絶景と絶句紅葉の嵐山　言成
牧駆ける力強さよ馬肥ゆる　太美子
苔纏ひ相寄る神を訪ふ紅葉　翠
高原のはるけし牧に馬肥ゆる　嵐耕
長江の巾広がりて豊の秋　箕川
調教の黒毛一頭馬肥ゆる　元彦
針千本のますげんまん夕紅葉　浩風
林檎落つ発明家の訃ありにけり　幹三
◎風立ちて夕日に炎立つ紅葉　あや

紅葉湖に富士逆さ富士泰然と　瑛三
老樹なほいのちの限り紅葉せり　ゆたか
人育て句を育て来し古酒新酒　あや
天守より望む豊年伊賀上野　言成
寂しさは言はず紅葉の色を愛づ　眞知子
馬肥ゆる針の動きに眉ひそめ　健馬
血汐てふ紅葉を仰ぐ大和路に　箕川
◎有線の正午の憩ひ豊の秋　浩風
豊の秋田圃に子らの戯れて　乱
行けど行けど加賀どこまでも豊の秋　瑛三
むらさきの美しき花籠秋灯下　太美子
薄紅葉してベランダの夜明けかな　京子
秋の日にぱつと散りたる粉薬　幹三
見はるかす野に点々と馬肥ゆる　言成
◎豊年の香に一村の浮みゐる　あや
豊年や古城址の水豊かなり　ゆたか
紅葉狩ゴルフボールを友と追ひ　元彦
名も知らぬ草紅葉にも生死あり　乱
豊年や野路ゆく人に僧もゐし　ゆたか
商談はとんとん拍子馬肥ゆる　洛艸
薄紅葉エントランスに華やぎを　太美子

誇りたく祝ぎたきものよ豊年を　翠
◎バス停を探してをれば威銃　幹三
序曲いま始まるごとく薄紅葉　浩一郎
豊年の田の風ずしり重きかな　あや
草原の起伏のはてや馬肥ゆる　敏夫
秋晴にオリーブ実る句会場　太美子
馬肥ゆる信濃はるばる旅心　翠
仰ぎ見てうつむき見ても紅葉かな　茉衣
三世代願ふ団地の大紅葉　敏夫
◎壷を溢る秋草に祝ぐ句の縁　あや
熱き恋の夢見る紅葉訪ひし夜は　暁子
この天を力の限り鳥渡る　浩一郎
豊の秋跳びて集まる雀かな　幹三
豊年や一村青き空の下　翠
五百回はおろそかならず菊に祝ぐ　あや
◎重ね来し会に今日照る紅葉かな　浩一郎
豊の秋天守閣には金の鴟尾　輝子
黄昏を下りゆく谷の紅葉かな　道子
夕日あび鶏頭の赤燃え立ちぬ　眞知子
山籠り三日で里の紅葉づれる　翠
硬き音鈍き音して木の実落つ　香月

日々仰ぐ背山は雑木紅葉かな　道子
この河はわれらが故郷秋の空　あや
豊年の空に星々ぎつしりと　暁子
山肌にほつと一灯初紅葉　翠
遺志つぎて子の守る牧や馬肥ゆる　瑛三
風渡る明るき田畑豊の秋　嵐耕
みちのくに今あれとこそ豊の秋　浩一郎
豊年や童の巨きランドセル　箕川
ゴンドラの下に開けし谷紅葉　洛艸
紅葉まで後一息の桜かな　元彦
馬肥ゆるたつぷり肥後の日差し浴び　乱
てらてらと毛並つやつや馬肥ゆる　浩風
くすみたる仏に紅葉明りかな　ゆたか
わが道を往く蟷螂の日和かな　瑛三
夕映えに紅を重ねてはぜ紅葉　輝子
初紅葉して一景の調へり　香月
◎草を食み海を眺めて馬肥ゆる　ゆたか
◎夕まぐれ白彼岸花宙に浮く　箕川
小鳥来るホテルに新たなる出会ひ　太美子
三代の田圃に集ふ豊の秋　乱

稲畑廣太郎先生 特選句 講評

牧の風ひきしまり来て馬肥ゆる　浩一郎

この時期 馬肥ゆる秋、長引く残暑に正に秋風が吹いて来て、その引き締まった風で 馬肥ゆる という季題が強調されている。

せせらぎの川となりゆく稲穂波　和江

稲穂の波が表現されているが、最初は 稲穂の そよぎも せせらぎのように小さかった波が やがて大河のごとくなるというダイナミックな光景を詠まれている。

風立ちて夕日に炎立つ紅葉　あや

夕日に炎立つ という表現で濃紅葉の姿が良く詠まれている。

有線の正午の憩ひ豊の秋　浩風

豊年の農村に有線放送が流れる ほのぼのとした豊の秋の感じがよく出ている。

豊年の香に一村の浮みゐる　あや

香りに着目されたことで 一村の稲穂の豊かに実った景色がよく描かれている。

バス停を探してをれば威銃　　幹三

私も山中湖の辺りで体験した覚えがあるが、初めて訪ねたところで 路を歩いていると図らずもバーンと爆発する威銃の音、ハプニング的な面白さがある。

壷を溢る秋草に祝ぐ句の縁　　あや

花器に溢れている秋草の 竜胆など色々な花があり、いばらの実もあり、これを ひっくるめて秋草と詠まれたところに祝心がよく出ている。

重ね来し会に今日照る紅葉かな　　浩一郎

昔から句会を重ねて来られて、五百回目の 今日照るという表現で歴史がズームアップ、ズームインされているように思う。

草を食み海を眺めて馬肥ゆる　　ゆたか

風景を素直に写生しているところが 先ず 素晴らしい。ロケーションが見える句で、ゆったりした景色が見てとれる。落ちついた表現。

夕まぐれ白彼岸花宙に浮く　　箕川

彼岸花は赤が定番であるが、白彼岸花は ところによっては幽霊花とも呼ばれるように、この世のものとも思えない妖しげな有様をよくとらえられている。

浩一郎 選

秋風や亡き人かぞふ住所録　　道子
滔滔と流れゆく淀小鳥来る　　あや
牧駆ける力強さよ馬肥ゆる　　太美子
山羊つなぐ綱の長くて草紅葉　　幹三
曲屋に慈しまれし馬肥ゆる　　香月
◎豊年を確と信じて祝ぐ手酌　　洛艸
馬肥ゆる空どこまでも透きし青　　京子
豊年や老農山車の試し曳き　　浩風
寂しさは言はず紅葉の色を愛づ　　眞知子
◎有線の正午の憩ひ豊の秋　　浩風
馬肥えて洗ひ甲斐ある毛並かな　　洛艸
行けど行けど加賀どこまでも豊の秋　　瑛三
名も知らぬ草紅葉にも生死あり　　乱
津波後の明日は初競り鰯雲　　元彦
夕餉疾く済ませ良夜に妻誘ふ　　乱
豊年の田の風ずしり重きかな　　あや
津波田に穂波の田あり豊の秋　　瑛三
仰ぎ見てうつむき見ても紅葉かな　　茉衣

出稼ぎの夫にテレする豊の秋　　洛艸
菱採りや乗せてもらへぬ盥舟　　道子
秋草をアレンジされし祝の句座　　言成
紅葉の葉しのばせ友に文送る　　眞知子
野の色の卓に華やぎ藤袴　　廣太郎
◎豊年や一村青き空の下　　翠
五百回はおろそかならず菊に祝ぐ　　あや
高石垣夕映紅葉なだれ落つ　　敏夫
山籠り三日で里の紅葉づれる　　翠
一本の巨樹に寄りそひ紅葉茶屋　　洛艸
紅葉を眼下にリフト登りゆく　　浩風
馬肥えて老騏壮心已みがたし　　箕川
◎日の匂溜めし厩舎に馬肥ゆる　　輝子
五百回菊の勲章飾る句座　　言成
検査終へ豊年一等米出荷　　京子
早稲晩稲みつしり重く豊の秋　　眞知子
遺志つぎて子の守る牧や馬肥ゆる　　瑛三
風渡る明るき田畑豊の秋　　嵐耕
◎草千里風の走りて馬肥ゆる　　あや
豊の秋天災人災乗り越えて　　暁子
くすみたる仏に紅葉明りかな　　ゆたか

初紅葉して一景の調へり　　香月
トンネルを出れば里あり豊の秋　　翠
◎小鳥来るホテルに新たなる出会ひ　　太美子
出来秋に休耕田のぽつねんと　　瑛三
三代の田圃に集ふ豊の秋　　乱
◎村あげて踊り支度や豊の秋　　洛艸
露天湯に味はふ空気峡紅葉　　言成
煙立つ浅間の牧場馬肥ゆる　　あや

句評

小鳥来るホテルに新たなる出会ひ　　太美子

出会いというものは、人に新たな心の通いをもたらし、また、そこから、今までにない新しい心の躍動が始まる。小鳥来るさわやかに心躍る季節のホテルの集いにその出会いがあったのである。祝ぎの心も伝わって来る。

豊年を確と信じて祝ぐ手酌　　洛艸

心配していた秋の収穫もどうやら豊年ということになりそうだ。いやもう絶対豊年だ。いずれみんなと集って祝杯の機会もあるだろうが、今は、心配を離れ、思い出となった苦労をひそかに顧みて、一人手酌で予祝の盃を挙げるのだ。

あや選

次々に刈られゆく田や豊の秋　眞知子
牧の風ひきしまり来て馬肥ゆる　浩一郎
馬肥ゆる風もまぐさも日の匂　輝子
秋麗ら浪高生らと大句会　和江
大津波あれど牧には馬肥ゆる　箕川
火山灰（よな）降れる牧駆けりつつ馬肥ゆる　浩一郎
洛東の秋空板木響かせて　京子
山羊つなぐ綱の長くて草紅葉　幹三
岩に敷き淵に漂ふ紅葉かな　箕川
豊作をゆつたり言祝ぐキーツかな　茉衣
曲屋に慈しまれし馬肥ゆる　香月
調教の黒毛一頭馬肥ゆる　元彦
◎出来秋を車窓に嵌めて賀へ急ぐ　廣太郎
◎磴行けば紅葉の海に小さき寺　輝子
半農にしては上々豊の秋　太美子
豊年や老農山車の試し曳き　浩風
老樹なほいのちの限り紅葉せり　ゆたか
祝宴や紅葉の色のワイン酌む　暁子

みちのくの桜紅葉のいかにとぞ　浩一郎
馬肥ゆる大地未来へ伸びゆけり　廣太郎
血汐てふ紅葉を仰ぐ大和路に　箕川
◎行けど行けど加賀どこまでも豊の秋　瑛三
東北に馬肥ゆる日の近からんを　茉衣
秋の日にぱつと散りたる粉薬　幹三
蒼天へ向けていななき馬肥ゆる　洛艸
◎豊年や千枚の田に千の彩　和江
津波後の明日は初競り鰯雲　元彦
点々と雫のやうに茱萸あかし　道子
バス停を探してをれば威銃　幹三
道しるべ被ひつくして草もみぢ　輝子
キリギリス枕頭に来て朝も居る　箕川
仰ぎ見てうつむき見ても紅葉かな　茉衣
興亡を秘めて埴輪や草錦　和江
◎この天を力の限り鳥渡る　浩一郎
庭園の静寂を切る松手入　京子
豊年や一村青き空の下　翠

重ね来し会に今日照る紅葉かな　浩一郎
黄昏を下りゆく谷の紅葉かな　道子
馬追ひの澄み渡る声芭蕉庵　京子
夕日あび鶏頭の赤燃え立ちぬ　眞知子
◎硬き音鈍き音して木の実落つ　香月
豊年の空に星々ぎつしりと　暁子
◎豊年を射貫く新幹線鉄路　廣太郎
苦も楽も旨さ増したる菊膾　和江
豊年の太鼓団地を包みゆく　敏夫
師を迎ふ緊張のあり秋灯下　太美子
くすみたる仏に紅葉明りかな　ゆたか
就中銀杏黄葉の黄をつくす　浩風
隠し湯へ紅葉明かりの岩梯子　義雄

句評

この天を力の限り鳥渡る　浩一郎

明石海峡から入ってくる渡り鳥の道に住むようになって、鳥の渡りに敏くなった。一群がわが空を通過するときには「ゆんゆん」という音ともならぬ翼の音がひびく。鳥たちがいかに渾身の力をふりしぼって、長い旅路を飛んでいくかということを思い、祈りの気持を持って仰ぎ見るようになった。まさに力のかぎり、この天を、この山河を渡りゆくのである。

行けど行けど加賀どこまでも豊の秋　瑛三

加賀平野は、早場米の産地で、この辺りよりは一足早く稔の秋となる。九月初めの頃の旅のお句である。加賀という地名がとてもよく効いている。作者と私とが共有する故郷の景であり、望郷の句であろう。

◆互選三句

暁子 選

師を迎ふ緊張のあり秋灯下　太美子
出来秋を車窓に嵌めて賀へ急ぐ　廣太郎
人育て句を育て来し古酒新酒　あや

瑛三 選

菱採りや乗せてもらへぬ盥舟　道子
日の匂溜めし厩舎に馬肥ゆる　輝子
隠し湯へ紅葉明かりの岩梯子　義雄

和江 選

俳諧の昔を今に鶏頭花　廣太郎
紅葉鮒太公望とワキ二人　元彦
草を食み海を眺めて馬肥ゆる　ゆたか

箕川 選

林檎落つ発明家の訃ありにけり　幹三
馬肥ゆる候と申さじ君ゆたか　瑛三
五百回はおろそかならず菊に祝ぐ　あや

京子 選

豊年を射貫く新幹線鉄路　廣太郎
祝宴や紅葉の色のワイン酌む　暁子
三世代願ふ団地の大紅葉　敏夫

健馬 選

紅葉まで後一息の桜かな　元彦
無位無冠旅こそよけれ鰯雲　義雄
胸張つて競りに立つ牛秋の空　和江

浩風 選

老樹なほいのちの限り紅葉せり　ゆたか
豊年の田の風ずしり重きかな　あや
馬肥ゆる米櫃ぬくき暮しかな　和江

言成 選

出来秋を車窓に嵌めて賀へ急ぐ　廣太郎
老樹なほいのちの限り紅葉せり　ゆたか
なかんづく満天星もみぢの赤が好き　輝子

太美子選

馬肥ゆる風もまぐさも日の匂　輝子
序曲いま始まるごとく薄紅葉　浩一郎
五百回はおろそかならず菊に祝ぐ　あや

輝子 選

蔦紅葉してニユータウン古りけらし　浩風
火山灰降れる牧駆けりつつ馬肥ゆる　浩一郎
針千本のますげんまん夕紅葉　浩風

敏夫 選

馬肥ゆる風もまぐさも日の匂　輝子
せせらぎの川となりゆく稲穂波　和江
豊年の田の風ずしり重きかな　あや

茉衣 選

蒼天へ向けていななき馬肥ゆる　洛艸
道しるべ被ひつくして草もみぢ　輝子
豊の秋跳びて集まる雀かな　幹三

眞知子選

興亡を秘めて埴輪や草錦　和江
豊年を射貫く新幹線鉄路　廣太郎
津波後の明日は初競り鰯雲　元彦

幹三 選

豊の秋我が身のごとき自転車漕ぐ　暁子
豊の秋天守閣には金の鴟尾　輝子
三角の山野路菊のさかりかな　道子

道子 選

遺志つぎて子の守る牧や馬肥ゆる　瑛三
新しき藁敷きつめよ馬肥ゆる　輝子
序曲いま始まるごとく薄紅葉　浩一郎

翠 選

山風す夜々ありてより紅葉づれる　浩一郎
庭園の静寂を切る松手入　京子
針千本のますげんまん夕紅葉　浩風

元彦 選

人育て句を育て来し古酒新酒　あや
野の色の卓に華やぎ藤袴　廣太郎
大津波あれど牧には馬肥ゆる　箕川

ゆたか選

豊年や千枚の田に千の彩　和江
豊年の田の風ずしり重きかな　あや
早稲晩稲みつしり重く豊の秋　眞知子

洛艸 選

日の匂溜めし厩舎に馬肥ゆる　輝子
豊年や会釈をくれし農の人　義雄
出来秋に休耕田のぽつねんと　瑛三

乱 選

隠し湯へ紅葉明かりの岩梯子　義雄
千枚田穂波わたり来豊の秋　輝子
わが道を往く蟷螂の日和かな　瑛三

◆参加者自選句

祝宴や紅葉の色のワイン酌む　暁子
行けど行けど加賀どこまでも豊の秋　瑛三
せせらぎの川となりゆく稲穂波　和江
夕まぐれ白彼岸花宙に浮く　箕川
馬追ひの澄み渡る声芭蕉庵　京子
鳥追ひし友偲び揺れ彼岸花　健馬
硬き音鈍き音して木の実落つ　香月
有線の正午の憩ひ豊の秋　浩風
見はるかす野に点々と馬肥ゆる　言成
牧駆ける力強さよ馬肥ゆる　太美子
磴行けば紅葉の海に小さき寺　輝子
三世代願ふ団地の大紅葉　敏夫
豊作を絵筆で写す印象派　茉衣
寂しさは言はず紅葉の色を愛づ　眞知子
山羊つなぐ綱の長くて草紅葉　幹三
さまざまの虫啼く庭でありしかな　道子
豊年や一村青き空の下　翠
津波後の明日は初競り鰯雲　元彦
老樹なほいのちの限り紅葉せり　ゆたか

無位無冠旅こそよけれ鰯雲　義雄
蒼天へ向けていななき馬肥ゆる　洛艸
書を閉ぢて今日の一日は紅葉狩　乱
風渡る明るき田畑豊の秋　嵐耕

一句鑑賞

萩揺るる風の行方を追ふごとく　暁子
（第四百九十九回句会報より）

萩は芒のように一面に咲き乱れるのではなく、庭の道に沿い植えられていることが多い。その道に沿い風が抜け、萩を揺らしてゆくのだが、それを逆に見て、萩が風を追っていくとみる発想の逆転が面白い。科学の分野でも時に逆転の発想が新しい知見を生む。今後の指針にしたいと心に刻んだ句である。

（鈴木敏夫）

あとがき

第五〇〇回という大きな節目の句会とはいえ、総員三十数名の小さな待兼山俳句会に、ホトトギスの稲畑廣太郎副主宰にお越し頂けましたのは誠に光栄に存じます。前代未聞ではなかろうかとさえ思います。その上に過分のご祝儀を頂き、心から厚くお礼申上げます。

なお、吉年虹二さん、長山あやさんからもご祝儀を頂戴しましたことを併せてご報告申上げます。有難うございました。

昭和54年4月の第一回浪高俳句教室開講以来、選者を続けて来られた林直入さんは当日ご病気で欠席されましたが、ご当人が一番残念に思っておられるのに違いありません。急遽、井上浩一郎さんに代役を勤めて頂いて、記念句会と祝賀懇親会を無事に済ませることができました。皆さんのご協力に感謝申上げます。

これまでも節目の句会の句会報は特別の編集がなされて参りましたが、今回は大きな節目の句会記録だけに充分な記録を残したいと考え、精一杯丁寧な編集を目指しました。

鶴岡言成記

発行年月　平成23年11月
発行人　待兼山俳句会
（世話人代表　鶴岡言成）
イラスト　夢童由里子
題字　河野ふくを
編集制作　デザイン球　石塚博和

【許可なく複製を禁ず】